

## 宗教的な話

著者	江口 一久
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	45
ページ	586-591
発行年	2003-12-26
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00001823">http://doi.org/10.15021/00001823</a>



宗  
教  
的  
な  
話

## 263 アツラーのほかに王なし

お話、お話。

あるところに男がいる。男は王さまの家来だった。男は王さまの屋敷にいき、すわるときにはいつも、「アツラーのほか、王なし」という。ほんとうのこと、そのことばが王さまをくるしめる。そのことばが王さまをくるしめた。

さて、ある日、王さまは男に、「おまえはどうして、アツラーのほか、王なしということがわかるのか」とたずねた。男は、「アツラーがあなたにいいことをしてくださいますように。アツラーのほか、王なし」といった。王さまは、「この男をしばれ」といった。人びとはこの男をしばりあげ、なぐった。男は、「アツラーのほか、王なし」といった。王さまは男に、「よし」といった。王さまは男に、「いつて、わしに三つのもをもつてこい。わしにしろいものとくろいものとあかいものをもつてくるのだ」といった。

さて、男は、「よろしい」といった。男はたちあがり、いつてしまった。男は道をどんどんどんあるいていき、とうとうある町についた。

さて、そこに鍛冶屋がいた。男は鍛冶屋に、「王さまに使いにだされた。王さまはしろいものとくろいものとあかいものをさがしてこいといわれた」といった。鍛冶屋は男に、「よろしい。きなさい。

おまえさんにおしえてやろう。おまえさんの町にかえったら、王さまにしろいのは太陽、くろいのは夜、あかいのは火だといいなさい」といった。男は鍛冶屋に、「よろしい」といった。男は道であらいて、かえつてきた。男は自分の町についた。男は自分の屋敷でねた。夜が起きて、朝になると、男は王さまのところに行った。男はすわる時、「アツラーのほか、王なし」といった。王さまは男に、「よし、わしはおまえに三つのもをさがしてこいといったがそれがなんであるかいうように」といった。男は、「しろいのは太陽、くろいのは夜、あかいのは火です」といった。王さまは男になにもすることができなかつた。

さて、王さまは銀の指輪をとり、男に、「ここに指輪がある。これをわしがかえせというまで、とつておくように」といった。男は王さまに、「よろしい」といった。男は指輪をとつた。男は自分のよめさんといっしょにウマをつないでおく杭のところをほり、そこに指輪をうめた。

さて、王さまは男を旅にだした。

さて、王さまはいくと、男のよめさんをさがし、いろいろなものをやった。王さまは女に指輪のあるところをおしえるようにいった。女はウマをつないでおく杭のところをほりかえし、指輪をとると、王さまにわたした。夜がふけると、王さまはかけていき、その指輪を川にすてた。

さて、魚はその指輪にとびつき、指輪をのみこんでしまった。

さて、男は王さまにつかわされた旅からかえってくる。男が川岸にやってくると、人びとが魚をつかまえていた。男はその魚をかけた。ほんとうのこと、男のかつた魚のなかの一匹が指輪をのみこんでいた。

さて、男たちは魚をやいた。男たちは旅をともにした人びととそ  
の魚をわけた。

さて、ほんとうのこと男は指輪をのみこんだ魚をたべようとして、とり、やいて、腹をひらいた。そこに指輪があつた。

さて、男は指輪をとつて、ポケットにいれておいた。男は道をおいて、自分の屋敷にかえつてきた。夜があけて、朝になった。男は王さまの家来たちのいるところへやってきた。男はすわる時、「アツラーのほか、王なし」といった。王さまは男に、「いって、わしがおまえにとつておいてくれといった日にわたした指輪をもつてこい」といった。男は、「よろしい」といった。男は道のあるところ家にかえつた。男はよめさんに、「こい。指輪をおいてあるところをほりかえそう」といった。女がたちあがつた。二人はいくと、指輪をほりだそうとした。指輪はなかつた。男はよめさんに、「指輪をうめるときには、わしとおまえとわしらをおつくりになつたアツラーしかいなかった。指輪はどうなつたのか」といった。女は男に、「しらない」といった。

さて、男は道のあるき、王さまの屋敷のまえについた。男はすわる時、「アツラーのほか、王なし」といった。

さて、男は自分のポケットから指輪をだして、王さまにわたした。王さまは男になにもすることができなかったとき。

(一九八三年一月二〇日、語り手 ハディージャ・ブーバ、ガウンデレにて)

## 264 預言者モハンマドウの時代の話

お話、お話。これは、言い伝えて、おとき話ではない。

あるところに男がいた。男には、一人のよめさんがいた。

さて、男は生活がぐるしかつた。男は、なにもなくなつてしまつた。

さて、男のよめさんは、「どうして、おまえさんはお父さんの仕事をつがえないの」といった。

さて、男はよめさんに、「いや、父親の仕事をつぐのははずかしい」といった。父親は盗人だつた。父親は死んでしまつていた。

さて、よめさんは男に父親の仕事をつぐようにといった。

さて、よめさんは男に、「どうしたの。つきなさい」といった。

さて、男はやってくると、モスクのなかにはいった。預言者がやつてきて、モスクのなかにはいった。

さて、男は預言者のサンダルをぬすんで、もっていつてしまった。男は片方のサンダルをとった。もう一方はとらなかつた。男は片方だけをもって、家にかえつた。

さて、男はあるアラビア人の商店にいった。

さて、男は、「店よ、この預言者のサンダルの徳のゆえ、ひらけ。わたしはすきなものをすべてとる」といった。

さて、商店がひらいた。男は店にあつたものをどんどんとつて、家にもつていった。

さて、男はサンダルをおきわすれた。男は家にかえつた。

さて、夜があけて、朝になつた。アラビア人がやってくる、品物をもつていかれたあとだつた。サンダルは預言者のサンダルだつた。

さて、アラビア人はこわくなつた。店主はいくと、みんなにそのことをはなした。店主は王さまの家来たちのところにいき、自分のみたことをはなした。ごらんのとおり、そこにサンダルがあつた。

さて、人びとはこの出来事を町の人たちにしらせた。

さて、若者(男とおなじ)はたちあがつた。若者は王さまの屋敷のまえにいった。家来たちがたくさんあつまつていた。若者はサンダルの話をもつてきた。若者は、「サンダルをぬすんだのは、わたしだ。こういう理由でわたしはサンダルをぬすんだのだ」といった。

さて、王さまは肘をついていたが、おきあがつて、若者に、「わしは、おまえにおまえのぬすんだものの倍のものをやる」といった。王さまは若者に、「わしはおまえに祈禱をしてやる。聖なるアツラーがおまえのほしいものをすべてあたえられますように」といった。アラビア人はたちあがつて、すわり、若者に、「わたしはおまえさんにおまえさんがぬすんだものの倍をやる」といった。預言者が、「わたしも、おまえさんの祈禱をたすけよう」といった。殉教者アリユムは、「わたしも、おまえさんの祈禱をたすけよう」といった。

さて、若者は自分の屋敷にかえつてきた。こうして、若者は金持ちになつた。

預言者は自分のサンダルをとりもどしたとき。

お話は、おしまい。

(一九八三年一月二三日、語り手 ハディージャ・プーバ、ガウンデレにて)

## 265 貧乏人

ある人がいた。この人は、自分は貧乏人だといった。この人は小便をする場所すら手にはいらなかつた。この人はいつて、主にあい、どうして、自分には五フランすらないのかたずねるといった。

男はたちあがり、道があるいていった。男はどんどんあるいていく。男は野原のまんなかに入った。いくと、イスラム教の先生がいた。先生は、先生とよめさんというだけだった。わかるな。この野原で、この先生にはべつの仕事がなかった。夜があけて、朝になると、先生は勉強をする。夜も、勉強をする。よめさんはカタガユすらつくらなかった。日暮れどきになると、餅が二つ天からおちてくる。一つは、先生のため。もう一つは、よめさんのためだった。二人はそれをたべる。二人はそれをのこす。朝も、おなじだった。昼も、おなじだった。

さて、男はそこにいくと、「平安、なんじらにあれ」と挨拶をした。男はイスラム教の先生のところで、「平安、なんじらにあれ」と挨拶をした。男が、「平安、なんじらにあれ」と挨拶をすると、先生は男に、「きなさい」といった。二人は入り口の小屋で挨拶をかわした。二人はすわっている。先生は男に、「おまえさんはどこからきて、どこにいくのか」という。男は、「わたしは村をでて、主にあいにいき、どうしてわたしには、この世にうまれてからずっと、五フランすらなく、まして、きるものなど手にはいらないのかたずねるのだ」といった。先生は、「よろしい」といった。昼になると、餅が三つおちてきた。餅三つのうち一つは、よそのものの、一つは先生のもの、一つは先生のよめさんのものだった。さて、先生はよそのもののためにもらった餅をかくした。先生は自

分の餅を半分とり、よそのものにやった。先生は残りの半分をとり、それをたべた。先生のよめさんは一つたべた。先生は一つをとっておいだ。

さて、先生は男に、「よろしい。問題はない。おまえさんはわたしの仕事をみたな。おまえさんは、主にあいにいくという。主にであつたら、あの世でどのような償いをうけるかたずねておくれ」という。男は、「よろしい。わかった」といった。男はそこをとおりすぎて、野原のまんなかに入った。男は遊牧民をみつけた。遊牧民には人をころし、その人のものをうばうよりほか、なんの仕事もなかった。男は遊牧民のところいき、「平安、なんじらにあれ」と挨拶をした。遊牧民は男をむかえて、「おまえさんはどこからきて、どこにいくのか」といった。男は、「わたしは、いって、主にであい、どうして、わたしの体につけるものすらないのかたずねるのだ」といった。遊牧民は、「よろしい。すわって、わたしをまわいておくれ」といった。遊牧民は矢筒を肩にかけ、そのへんをまわり、野原の動物をころして、もってきて、その皮をはいだ。二人はその肉を火であぶって、たべた。遊牧民は、その残りを男のためにつつんでやった。遊牧民が、「このように、わたしの仕事は強盗のほかなにもない。おまえさんがいって、主にであつたら、主にあの世でどのような償いをうけるかたずねておくれ」といった。男は、「よろしい」といった。男はそこをとおりすぎていった。男は野原

のまんなかに入った。いくと、そこにダウンデ（クワ科の植物、イチジクの仲間。実は食用になる）の木があった、男はダウンデの木のところにいくと、やすんでいる。

さて、男はだれかが自分にダウンデの実をなげてくれる音をきいた。男はそれを取り、たべた。だれかが、またしても、もう一つなげてくれたので、男はそれを取り、たべた。男がうえをみると、木のうえに老人がすわっていた。老人は、じつは、天使ジビリール（キリスト教ではガブリエルという）だった。

さて、天使ジビリールは男に、「おまえさんはどこからきて、どこにいくのか」といった。男は、「わたしはいつて、主にであつて、どうして、わたしにはこの世でなにもないのかたずねるのだ」といった。天使ジビリールは男に、「よろしい。ここにいなさい。わたしはいつて、主にそのようにいおう」といった。天使ジビリールはいくと、主にであいい、主に、「こういうことです。ある人があなたのところへやってきました。その人は、どうして、きるものはもちろんのこと、身にまとうものすら手にはいらぬのかわからないとわたしにいました」といった。主は天使ジビリールに、「よろしい。ジビリールよ、いつて、その人をつれていき、その人のあの世の屋敷をみせてやりなさい」といった。天使ジビリールは男をつれていき、男にその男のあの世の屋敷をみせた。男がいくと、それは天国にあった。

さて、天使ジビリールは男をもとにもどした。男は、「いいや、わたしは家にかえらない。イスラム教の先生が野原のまんなかについて、その人の仕事は勉強することだけだ。その人はあの世でどのような償いをうけるかたずねてくれといった」といった。さつそく、主は天使ジビリールをおおくりになり、「その人をつれていき、その先生のあの世の屋敷をみせてやりなさい」という。男がいくと、先生のあの世の屋敷で、火がもえていた。

さて、天使ジビリールは男をダウンデの木のしたまでつれてかえつてきて、「いつてしまいなさい。家にかえりなさい」という。男は、「いいや、わたしは家にかえらない。ある遊牧民が野原のまんなかにいる。その人は自分の仕事は人をころし、その人のものをうばうほかなにもないといった。その人は自分があの世でどんな償いをうけるかたずねてくれといった」といった。主は天使ジビリールをつかわされ、「その人をつれていき、その遊牧民のあの世の屋敷をみせてやりなさい」という。天使ジビリールは、男をその遊牧民のあの世の屋敷までつれていった。男がいつてみると、遊牧民のあの世の屋敷は天国にあった。

さて、天使ジビリールは男をもとにもどして、男に、「家にかえりなさい。さて、たちあがるように」といった。男はかえつてくる。男が強盗がいたところへいくと、そこに強盗がいた。天使ジビリールは男に、「その強盗にいなさい。家にかえるとき、その強

盗がいたら、その強盗に、いままで、フルベ族はおそったことがなく、フルベ族以外の人をころし、その人のものをうばうだけだったといひなさい」といつていた。(男はそのようにつたえる。)

さて、天使ジビリールは男のところへやつてきた。男は、「わたしは家にかえらない」といつた。天使ジビリールは主のところへいくと、それをつたえた。主は、その男がほかの人とおなじように首をしめてころされるようにいつた。(天使ジビリールはそれを男につたえる。)男はイスラム教の先生のところにもどつてきた。天使ジビリールは男に、「その先生に、餅をよそものにやらなかつたといひこと、先生が地獄の火にはいるのだといひなさい」といつた。男はイスラム教の先生のところにもどつてきて、そうつたえた。イスラム教の先生は(いままでしたことより)ずっとひどいことをした。先生は本をとり、やいてしまひ、「一生懸命にしたことが役にたたなかつた。いきていたことが、役にたたなかつた」といつた。先生は本をやき、酒をのみにいつた。男は家にかえつてきて、家で一晚ねた。男は、「私は、穴をほり、葦簀でもたて、よこになるところを手にいれよう」といつた。男が穴をほつてると、へビにかまれて、死んでしまつとき。

お話は、おしまひ。

(一九七〇年二月二四日、語り手 バーサーウォ村出身のアブド  
ウツラーイ・ウスマース、マルアにて)



